第786回東京定期演奏会

2026年 12月4日(金) 19:00開演
12月5日(土) 14:00開演
サントリーホール

プレトーク 井上 登喜子氏　金曜日／18:30〜 土曜日／13:20〜

助成：
文化庁文化芸術振興費補助金
（舞台芸術等総合支援事業（公演創造活動））
独立行政法人日本芸術文化振興会

■1回券料金
S ¥9,500　A ¥8,000　B ¥7,000　C 完売　P ¥5,000　Ys（25歳以下）¥2,500
※障害者手帳をお持ちの方は割引きがございますので、サービスセンターにお問い合わせください。

TOKYO

圧倒的な音響とスケールで、知性も感性も動かされる!

レーガー：
ピアノ協奏曲 ヘ短調 op.114

ブラームス：
交響曲第2番 ニ長調 op.73



指揮：沖澤 のどか



ピアノ：阪田 知樹

次回東京定期演奏会指揮者にインタビュー!

沖澤 のどか編　　ききて　井上 登喜子

12月は新世代のマエストロ、沖澤のどかの登場に注目が集まる。日本フィルとの初共演（2021年）となったメンデルスゾーン《スコットランド》の名演を思い出す人も多いだろう。今回取り上げるブラームスの交響曲第2番は、沖澤にとって特別な作品。実は2020年に日本フィルと初共演する予定で選曲していたが、コロナ禍で中止となった。6年ぶりの実現となる。

「ブラームスの4つの交響曲の中で、第2番はいつも自分にとって一番自然な場所にある、とても大切な作品です。どこか解き放たれるような、心がほぐされるような曲なんです。今回のプログラムで、レーガーの大変な大作（かなり凝っていて激しい曲）の後に、ブラームスの第2番を置くのはとても良い対比であり、素晴らしい組み合わせだと思います」。

そのレーガー（1873-1916）は、自らをバッハ、ベートーヴェン、ブラームスというドイツ音楽の系譜に位置づけ、ブラームスの管弦楽作品等をピアノ独奏用に編曲するという敬愛ぶりだ。さらに、ブラームスとレーガーの間には興味深い共通点がある。それはドイツの都市マイニンゲンで育まれた音楽の伝統である。

「ブラームスはマイニンゲン宮廷楽長だったハンス・フォン・ビューローやその後任のフリッツ・シュタインバッハと交流があり、今日、ブラームスの交響曲を演奏する際には、『マイニンゲン（マイニンゲン宮廷楽団）の伝統』が半ば標準的な解釈のベースとして共有されています。この宮廷楽団はブラームスとの共同作業を通して『どのようにフレーズを作っていたか』という詳細な記録を残しているんです。私はベルリン・フィルでキリル・ペトレンコ氏のアシスタントをしていた時期にそれを知りました。ペトレンコさんがブラームスの交響曲第4番の演奏で『マイニンゲンの伝統』を取り入れているのを目の当たりにして、『これは日本のオーケストラでも取り組む価値がある』と感じました。

そしてレーガーはマイニンゲン宮廷楽団が解散する前の『最後の宮廷楽長』なのです。プログラムを組んだ後にその共通点に気づいたのですが、レーガーとブラームスが『マイニンゲン』という街を通して繋がっていたのは非常に面白い発見でした。本番までにさらに掘り下げたいと思っています」。

レーガーのピアノ協奏曲は滅多に演奏されない難曲。「音にするだけでも一苦労ですが、日本フィルとであれば『どう響かせたいか』という深いところまで掘り下げられると確信しています」。一方、「聴く側にとってはそれほど難しくないと思っています。長大ですが、ラフマニノフなどが好きな方なら絶対にハマる作品です」。

ソリストには若手実力派ピアニストの阪田知樹を迎える。「阪田さんは何でも弾ける才能とスケールの大きさを持っています。レーガーの作品は非常に濃密で、対位法的な部分や分析的な難しさがありますが、彼ならそれを全て理解した上で演奏してくれると確信し、『こんな機会はない、すぐやりましょう!』となりました。阪田さんは作曲もされる方で、オーケストラの音を非常によく聴いて演奏されるピアニストです。レーガーのコンチェルトは極めて交響的（シンフォニック）なので、阪田さん、日本フィルと共に音楽を探求していく時間が今から本当に楽しみです」。

プログラムを繋ぐ共通点もある。「今回、第2楽章がどちらの曲でも重要な鍵になると感じています。レーガーの第2楽章にはコラール（聖歌）が用いられており、激しさのあとの「祈り」がテーマになります。ブラームスの第2番も、明るく朗らかな表情の裏にある第2楽章の深みや温かい暗さがある——そこをしっかり音で表現できたら、間違いなく素晴らしい演奏になるでしょう。世界で様々な出来事が起こっている今だからこそ、レーガーの密度の濃い音の洪水と第2楽章の『祈り』、そしてブラームスの深い情緒は、今を生きる私たちの音楽としてリアルに響くはずです」。

沖澤、阪田と日本フィルが紡ぐ音楽は、私たちの耳を次の時代へと拓いてくれるものとなるだろう。まさに70周年に相応しいプログラムをサントリーホールで体験してほしい。